大阪狭山市立狭山中学校

令和５年（2023 年）
７月 18 日
道徳通信

発行：吉村

どう説く？道徳通信

◎ 二年生の道徳では、「松葉づえ」というお話を通して、“友情”とはどういうものか、またこれから友だちと共に過ごす中で互いに信頼し合い、より豊かな人間関係を築いていくためにはどんなことが大切かを考えました。

～あらすじ～

転校生の大野くんは骨折の治療中で松葉づえをついている。クラスメイトは移動や授業ノートの手助けなど、大野くんに優しくしようとするが、伊藤くんだけは先回りして親切にする必要はないと積極的ではなかった。けれど大野くんが中間テストで最高点をとったり、将棋部で強さを発揮したりするうちにみんなは徐々に手を貸さなくなっていく。ある日、走ってきた女子が松葉づえにつまづき転ぶと、大野くんを責める雰囲気になった。そんなとき、伊藤くんが呼びかけた言葉に「僕」は・・・。

伊藤くんが発した一言、「みんな、誰のために大野に協力してやってたんだよ。友だちって言ってたじゃないか。」この言葉に「僕」の心は大きく揺らぎます。大野くんに対して親切にしていた「僕」が態度を変えていく心情の変化を通して、「友情」って何だろう？と自分自身の生活に置きかえながらそれぞれ考えていました。「友情」は一方的なものではなく、平等で対等なもの。そういう面に気づき、これから友だちとより良い関係を作っていきたいですね。

みんなの深い～感想を一部紹介します（他にもたくさんステキな感想ありました！）

- 友情とは相手のことを知っていくうちに自然とつくりだされていくものなのかなと思いました。友だちと関わる中で、いやなこともたくさんあるけど、しっかりと向き合っていこうと思いました。
- “友情”と“自己満足”をはき違えてはいけない。
- 私が思う友情は、友だち思いとか親切とか良いことをすることだと思っていたけど、本当は自分が今やってあげて良い人やんって思おうとしている時があると思った。友情は大事なことだけど一度崩壊したら戻すのにだいぶ時間がかかってしまうと思った。
- 自分と主人公が似ているかもと思った。自分が主人公だったら将棋に負けたとき、「今まで本当は自分のこと見下してたのかな」とか思ってやっぱり気に入らないだろうなと思った。でも大野くんも素で生きているだけだから、才能があるからとか自分よりできるからという理由で離れていくのはかわいそうだしプライドが高いってそういうことだなと思った。

◎ 三年生では、「一冊のノート」というお話から、“家族のあり方”について考えました。家族の形態は時を重ねるにつれて変わっていきます。今ある当たり前に感じていることが当たり前ではない状況になることももちろんでてきます。そんなことを想像し、自分の家族を思い浮かべながらそれぞれが"家族”について向き合った時間でした。

～あらすじ～

物忘れが激しくなった祖母に強い不満を抱く「僕」。ある日、祖母が誤って片付けてしまった僕のものを探すために引き出しを開けると、中から手垢に汚れた一冊のノートが出てきた。それは祖母が少し震えた文字でつづった日記だった。孫や家族への愛情と老いていく自分への不安が、月日を重ねて乱れていく文字で書かれていたのだった。

人は過去から受け継がれてきた生命の流れの中で生きています。自分の成長を願い、たくさんの愛情を注いできてくれた身近な人たちに対してどんどん成長していっているみんなは今どのような接し方をしていますか？家族に対して、どのような思いを抱いて過ごしているでしょうか。

家族間であっても心がすれ違い、衝突が生じることがあるのも事実。けれど、だからこそ普段家族からしてもらっていることや愛情に気づける“自分”でいれたら、と感じますし、成長していく“自分”が家族の中で担っていくことのできる役割もあるはず。それを見つけて、家族の一員として“家族”を支え、大切にしていけるとステキですね。

みんなの深い～感想を一部紹介します（他にもたくさんステキな感想ありました！）

- 家族がいるから生きていけるし、人は必ず一人では生きていけないので、日頃の感謝を伝えたり、家族でご飯を食べれたりできることなどが、家族みんなの幸せなのかなと思いました。
- 自分が助けられた時は相手が家族でも忘れずに自分にしてくれたように気持ちを行動で返すことが家族の幸せだと思った。
- 笑い合っている今の時間がいつまでも続くわけではないから、大切にしないといけない。
- 今までごめんという気持ちとおばあちゃんを全力でサポートする気持ちを大切にしたい。
- 今まで何も考えずにおばあちゃんにひどいことを言ってしまったことを後悔した。これからはたくさんおばあちゃんを手伝って家族で支え合っていきたいと思った。おばあちゃんのいることに感謝して、これからはおばあちゃんに守られるだけでなく、自分が頼られる存在になりたいと思った。
- 自分の思うことだけを口にして、その人の日頃を知らずに非難するのではなく、その人なりの努力をしていると理解してこれから接する。